

こども虐待に対する保健師、助産師の支援経験と認識

小笹美子1)、長弘千恵2)、外間知香子3)、當山裕子3)、仲野宏子4)、榊原文1)、福岡理英1)、白谷佳恵5)

1) 島根大学医学部看護学科、2) 徳島文理大学保健福祉学部看護学科、3) 琉球大学医学部保健学科、
4) 国際医療福祉大学福岡看護学部看護学科、5) 横浜市立大学医学部看護学科

目的

こども虐待の発生予防、早期発見・早期対応を行うために、こども虐待に対する保健師、助産師の支援経験とこども虐待認識について検討した。

用語の定義:

本研究ではこども虐待ボーダーライン事例を「保健師等が母子保健活動を展開する中で虐待事例かどうか判断に迷いながら継続支援を行っている事例とし、明らかな虐待事例は含まない」とした。

結果

表1 対象者の特徴

	保健師N=688	助産師N=53
平均年齢	38.9歳	33.5歳
平均勤務年数	14.2年	9.5年
こども虐待への関心あり	98.0%	92.5%
こども虐待事例の経験あり	83.4%	41.5%
要保護児童対策地域会議の参加あり	71.3%	22.1%
今までのこども虐待支援経験数	13.7ケース	1.4ケース
ケース支援について相談できる人がいる	96.9%	70.6%
こども虐待の研修を受講あり	78.5%	38.2%
こども虐待の支援で困ったことがある	78.4%	36.8%

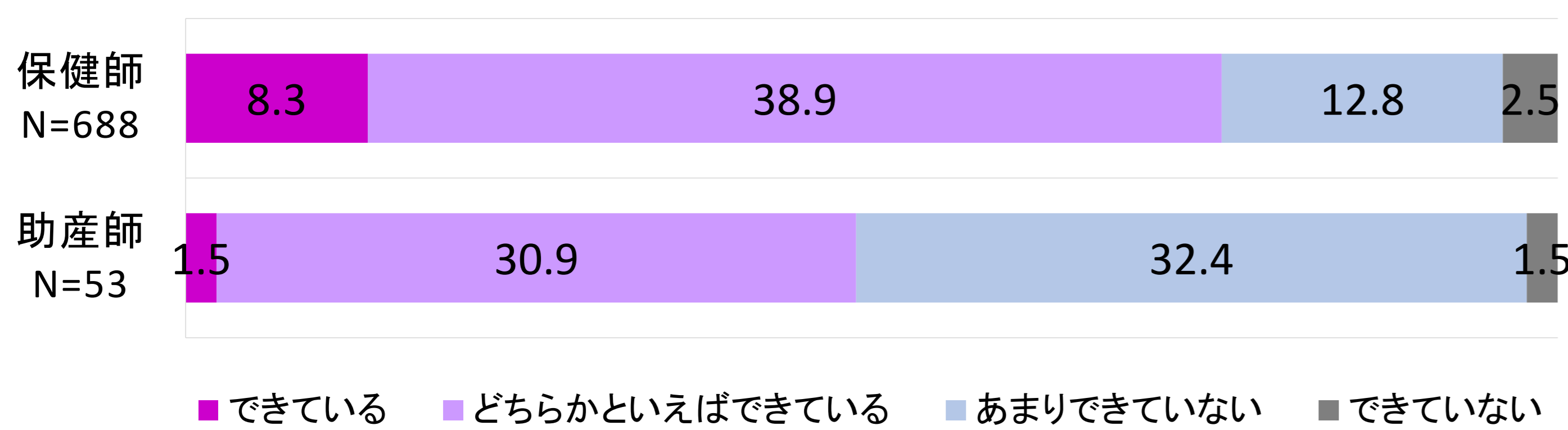


図1 職場のこども虐待への取り組み

研究方法

調査期間: 2014年9月から2015年2月

調査方法: 郵送による自記式質問紙調査

対象者: 13都道府県の市町村、保健所210か所の保健師1868名と5県の医療機関の助産師132名であった。回収率は保健師が42.8% (800名)、助産師が51.5% (68名)であった。

調査内容: 基本属性、こども虐待ボーダーライン事例支援経験数、こども虐待事例の母親の背景別経験の有無、高橋らの調査票を参考に自作したこども虐待に関する認識30項目等である。こども虐待に関する認識は「特に問題はない」0点~「1回でもその行為は虐待である」4点の5件法とした。

分析: こども虐待認識に関する30項目すべてに回答した741名を分析対象とし、保健師、助産師別の虐待に関する認識の平均値について検討した。さらにこども虐待に関する認識のうち23項目について因子分析を行った。統計解析ソフトSPSSを用い、統計学的有意水準は $p < 0.05$ とした。

倫理的配慮: 無記名自記式質問紙調査時に対象者に研究目的、方法、回答を拒否する権利があることなどを調査票に同封する文書で説明し、対象者が自己意志に基づいて研究協力を判断するための情報を提供した。本研究者と対象者の間には利害関係は存在しない。

本調査は島根大学医学部の倫理審査委員会(第233号)の承認後に実施した。

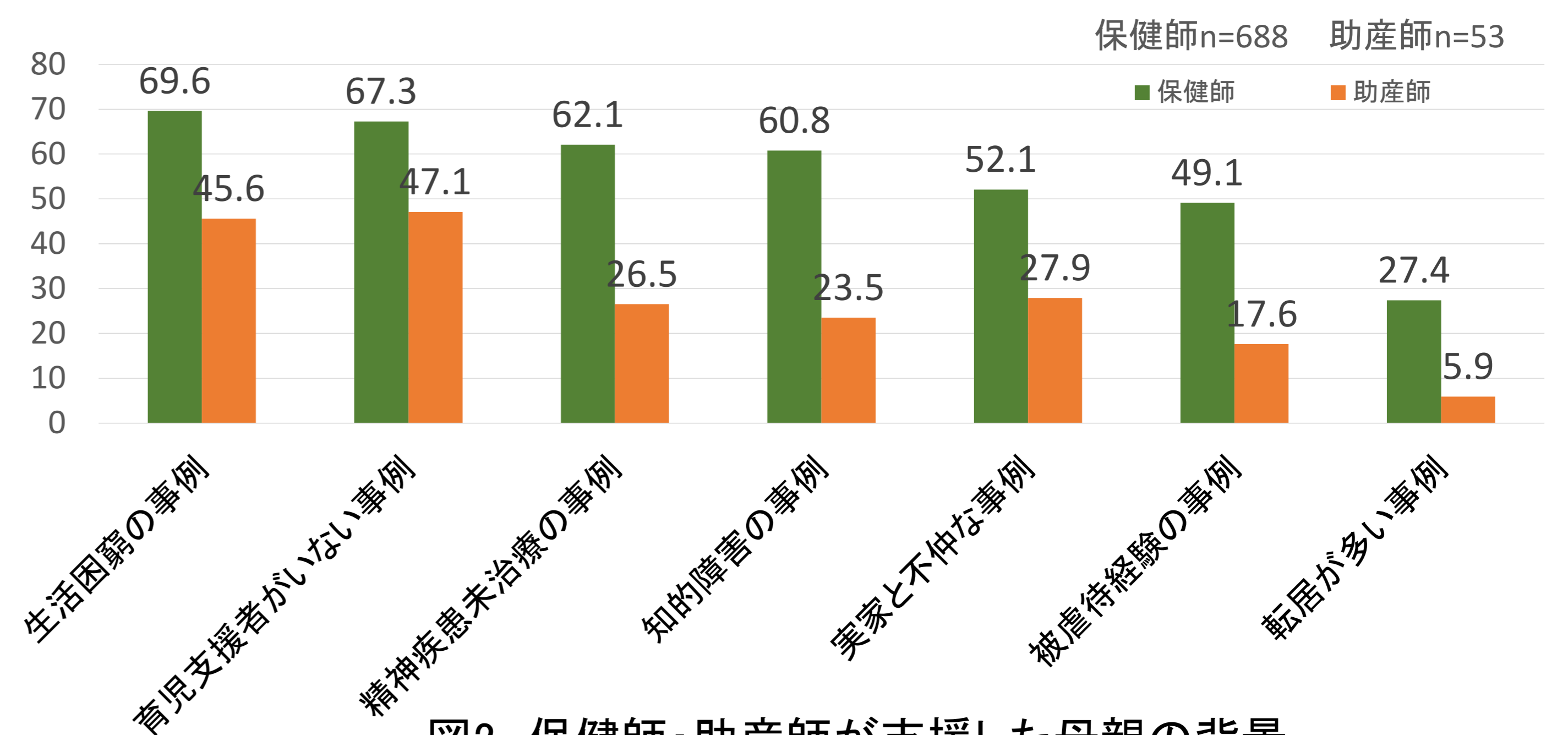


図2 保健師・助産師が支援した母親の背景

表2 こども虐待に関する認識—保健師・助産師—

保健師 n=688	助産師 n=53	P値	NO	項目	因子	1	2	3
3.89	3.91	0.819	1	配偶者や同居人などが虐待行為を行っているにもかかわらず、それを放置する	生命の危機			
3.88	3.89	0.723	2	子どもに慢性の病気があり、生命の危機があるのに病院に連れて行かない				
3.64	3.64	0.563	3	カラオケなどで遊んでいて家に帰らず、小さな子どもの世話をしない				
3.62	3.64	0.977	4	子どもの世話を嫌がり、食事を与える回数が少ない				
3.43	3.23	0.144	5	夜に、幼い子を寝かせつけて、夫婦で子どもを置いて遊びにでかける				
3.24	3.26	0.866	6	極端に不潔な環境の中で、生活させる。				
3.22	3.06	0.401	7	子どもが刃物で遊んでいるのに、止めない				
2.71	2.43	0.094	8	子どもの虫歯の治療をしない	親の都合優先	0.795	-0.011	-0.113
3.09	2.60	0.002	9	買い物をする間、子どもを車の中に残しておいた		0.785	-0.039	-0.157
3.10	2.92	0.254	10	子どもが精神的に不安定なのに、専門的な診断や援助を受けに連れていかない		0.762	-0.079	0.006
2.39	2.02	0.015	11	高熱を座薬によって無理に下げ、次の日保育園や学校に連れて行く		0.694	0.124	-0.095
3.21	2.79	0.005	12	家出した子どもが帰ってきても家に入れない		0.652	-0.088	0.030
2.35	1.91	0.001	13	大声でどなる		0.648	0.123	-0.027
3.03	3.06	0.959	14	子どもをつねる		0.634	0.069	-0.050
1.96	1.68	0.060	15	親の帰りが遅いため、いつも子どもだけで夕食を食べている。	0.570	0.073	0.097	
3.29	3.28	0.871	16	親がギャンブルや酒でお金を使い、子どもの給食費や保育料が払えない	0.562	-0.202	0.251	
1.64	1.25	0.006	17	転居をくり返す	0.363	0.145	0.270	
2.13	2.08	0.502	18	母親の注視が乳児に向けられていない	慈愛の欠如	-0.003	0.887	-0.109
2.25	2.25	0.934	19	乳幼児をあやしたり、抱いたりしない		-0.065	0.842	0.044
2.11	2.02	0.281	20	子どもの泣き声に対応しない		0.070	0.829	-0.153
1.81	1.92	0.332	21	母親の視線と乳児の視線が一致しない(アイコンタクトが見られない)		-0.025	0.787	0.055
1.71	1.66	0.655	22	乳幼児の頭、身体をなでる行動がみられない		-0.042	0.679	0.142
2.30	2.06	0.255	23	子どもを保護して欲しい等と 養育者が自ら相談してくる	養育の放棄	-0.212	-0.037	0.842
2.84	2.72	0.442	24	子どもの表情がとぼしく、体重増加が良くない		-0.149	-0.011	0.816
2.90	2.57	0.036	25	親に精神疾患や強いうつ状態があり、全く面倒をみない		0.001	-0.090	0.746
2.48	2.25	0.205	26	理由なく、子どもを保育所に連れて行かない		0.174	-0.072	0.741
2.66	3.06	0.006	27	理由がなく健診などを受けない		0.140	0.096	0.524
2.42	2.38	0.873	28	母親が「望まない妊娠、出産だ」という		0.093	0.206	0.471
2.80	2.74	0.784	29	洗濯をあまりせず、子どもに不衛生な服を着せている		0.316	0.039	0.462
2.65	2.72	0.537	30	母親が「本当に育てにくい子どもだ」といい、あまり世話をしない		-0.029	0.382	0.438

α 係数は親の都合を優先 $\alpha=0.86$ 、慈愛の欠如 $\alpha=0.86$ 、養育の放棄 $\alpha=0.85$

因子間相関	1	2	3
1	1.000	0.494	0.580
2		1.000	0.576
3			1.000

まとめ

- こども虐待事例支援経験数は保健師が13.7ケース、助産師が1.4ケースであった。
- こども虐待に対する認識の平均値は保健師が助産師よりも高い項目が多かった。有意な差が認められる項目は「大声でどなる」「買い物をする間、子どもを車の中に残しておいた」「転居をくり返す」などであった。
- こども虐待に関する認識は保健師、助産師ともに得点が高い「生命の危機」に関する項目を除いた23項目の因子分解の結果、「親の都合優先」、「慈愛の欠如」、「養育の放棄」の3因子が得られた。